

特別企画 3月3日(土) 14:55~17:25

## フリースタイル・グループディスカッション (FSGD)

モデレーター	討論者
内田若希 (九州大学)	+ 松田晃二郎 (九州大学大学院)
山津幸司 (佐賀大学)	+ 須崎康臣 (九州大学大学院)
中本浩揮 (鹿屋体育大学)	
奥野真由 (久留米大学)	+ 下園博信 (福岡大学)
総合司会 山口幸生 (福岡大学)	

### <企画趣旨>

山口幸生 (福岡大学)

今回の FSGD でも各テーマ 1 名の先生に話題提供していただき、参加者の皆さんと自由に討論していただく形式を用意しております。この際、特定の討論者に議論をリードしていただく役割を担っていただきます。また「自由に議論」とは言っても、専門家の集まる集会ですので、テーマに関する予備知識がないと議論参加が難しい点もあるかと思えます。そこで、話題提供者の先生に「事前必読論文」や「事前の準備」を提示していただいております。今年度の FSGD では、このような手順と、学会終了後の学会 Web サイトに掲載予定の参加者による「振り返り・まとめ」などを予定しております。このような方法により、「点」で終わりがちな FSGD における議論を「線」につなげて行ければ、と考えております。なかなか難しい点もあるかもしれませんが、本企画の趣旨をご理解いただき、ご参加いただければ幸いです。

### 「質的研究ことはじめ」

内田若希 (九州大学)

数多の質的研究の方法論を解説する書籍・文献が存在するにもかかわらず、いざ取り組んでみようとすると「質的研究ってよく分からない」という印象を持ったことがないだろうか。また、実際

にやってみても「このやり方で本当にあっているのか？」と頭を悩ませることになる。なんだか「モヤッ」とするのである。この「モヤッ」とする感じ、つまりそのわかりにくさや難しさの源泉はどこにあるのだろうか？ここでは、質的研究の実践にまつわる疑問を取り上げながら、参加者同士のディスカッションを通して、質的研究実践の理解と自信 (のようなもの) を深めることを目指したい。

### <事前必読文献>

なお、『サンデロウスキー, M. 谷津裕子・江藤裕之 (翻訳)(2013). 質的研究をめぐる 10 のキークエスチョン—サンデロウスキー論文に学ぶ— 医学書院』を読んでおくことをおすすめする。

### 「学校体育の有効性を示す研究デザイン」

山津 幸司 (佐賀大学)

大学体育や高校までの学校体育が様々な好影響を導くことを示すことは重要である。例えば、大学体育による週 1 回の筋力トレーニングが筋力を改善するとの報告 (林・宮本, 2009) は代表的な知見のひとつである。本論文では、介入内容 (筋力トレーニング) とアウトカム (筋力) の対応関係の強さ、また運動部活動の有無を考慮することで因果関係に迫ることができている。一方、アウトカムを社会的スキルに変えてみた場合はどう

だろうか。大学体育が社会的スキルを高める可能性は高いと思われるが、社会的スキルに影響しそうな他の要因が複数想定されるため、原著論文としてまとめるのにはかなりの工夫を要するものと思われる。本フリースタイルディスカッションでは、心理指標をアウトカムにした場合の大学体育・学校体育の有効性を示す研究デザインをどう工夫すればよいか、について議論したい。そのため、須崎氏には有効性を証明できる賛成派、山津は証明不可能とする反対派の立場から議論し、その議論とその後の参加者の意見を踏まえて有意義な結論を導きたい。(話を分かりやすくするため両者にはあえて極端な立場で議論してもらうことにした)

なお、須崎氏からは「全般的な心理社会的スキルを扱うのではなく、特定の状況(体育授業に限った)の心理社会的スキルの効果を検討していく」「介入研究では、介入群だけではなく、統制群を用いる」「横断研究だけではなく、縦断研究を用いた因果関係の検討」の要件を満たすことで証明可能な条件を満たしやすいとコメントを得ている。

#### <事前必読文献>

1)林直亨, 宮本忠吉. 週1回の大学授業における筋力トレーニングが筋力に与える影響. 体育学研究, 54巻1号, 137-143, 2009

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/54/1/54\\_a540114/article-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/54/1/54_a540114/article-char/ja/)

#### 「チームのメンタルトレーニング」

奥野真由 (久留米大学)

参加者の皆さんと、チームへのメンタルトレーニング(心理サポート)について、お話しを深めたいと思います。いざチームへ飛び込んでみると「頭では理解していても難しい」という思いをしたことが、私の少ない心理サポート経験においても数多くありました。そして、その難しかった出来事を、同じ様にチームへのサポートに取り組んでいる人達(サポート分野問わず)と共有し、ディスカッションすることで、次の心理サポートの糧にすることができた、ということが数多くあり

ました。チームへのメンタルトレーニング(心理サポート)とそこで感じる難しさについてのディスカッションを通して、参加者の皆さんが次へのヒントを得る機会になればと考えています。(以上、305字)

#### <事前必読文献>

事前必読文献はありませんが、以下の取り組みをして当日ご参加ください。

参加者の皆さんは、ご自身の心理サポート体験で難しさを感じた出来事について、メンタルトレーニングの重要なセッションである“振り返り”をしておいてください。これから心理サポートの実践を考えている方は“心理サポートを実践している自分をイメージ”しておいてください。

#### 「運動学習と実践現場をつなぐ」

中本浩揮 (鹿屋体育大学)

運動学習研究では、「いかに効率よく運動技能を獲得するか」について、伝統的に実験室での実験研究を中心に検討されてきた。しかし、実験室で扱われる学習課題は、実験的な厳密さを優先させた結果、単純、学習期間が短い、扱われる変数が少ないなど、実践場面と異なる点が多い。実際、実験室研究で有効とされる学習方略が、実践場面では有効ではなかったとする知見も散見される。実践場面での学習効率をあげることが運動学習研究の使命であるとするならば、伝統的な運動学習研究を脱し、新たな運動学習研究を推進していくためには何が必要なのだろうか？今回のFSGDでは、参加者の長期的な運動学習「経験」を元にディスカッションし、今後の運動学習研究の方向性を探ることを目指す。

#### <事前必読文献>

書籍は限定しないが、基礎的なスポーツ心理学の運動学習研究に関する章に眼を通して参加して頂きたい。